

**幼稚園3年間における幼児の社会的調整の発達 — 幼児の他児の対人葛藤に対する介入行動の発達に着目して —**

松原 未季（奈良教育大学次世代教員養成センター 特任講師）

**背景**

従来の対人葛藤に関する研究の多くは、実験法によって、対人葛藤という特定の事象をサンプリングして、自己調整や自己調整などの二者間の調整を分析しており、対人葛藤における幼児の発達が社会的な関係や環境の諸変化の中でダイナミックに起こることが捉えにくい。時間的空間的な変化を丹念に追うには、質的検討が必要である。本研究では、他児の対人葛藤場面に対する**非当事者の幼児の介入**の縦断的調査によって、介入が保育者の援助や、その幼児が置かれた状況や、他児との関係性、さらにその園の保育方針などの関係や環境の調整を受けながら、発達を遂げることを明らかにできる。

**目的**

幼児が保育者の援助、他児との出会いや関わり、自らが置かれた状況などの関係や環境を活用しながら他児との関係を調整することを「**社会的調整**」とし、幼児が幼稚園3年間でいかに社会的調整を図っているのかということ明らかにすることを目的とした。具体的には、幼稚園3年間同一のコホートの幼児を縦断的に調査し、幼児の介入が社会的関係や環境の影響を受けながらいかに発達するのかということを検討した。

**方法** 幼稚園3年間のフィールド観察と保育者へのインタビューを中心とした質的研究を行った。

**結果と考察****研究1：幼稚園3年間における介入の発達**

A. 3歳児は、他児の対人葛藤を、**要解決の事態として認識**し、その対処に参加していた。3歳児は、〈注意〉、〈加勢〉、〈仲裁〉などによって葛藤状況を変化させていた。介入は、保育者の注意の模倣や、保育者の援助の代行、**保育者の援助の模倣的なもの**が中心であり、介入行為を成立させる「型」を定着させ始めた。

B. 4歳児では、単に保育者の援助を模倣して注意するだけではなく、介入児は葛藤場面から自ら状況を理解し判断して、当事者の幼児に、具体的に問題点や、とるべき行動を示唆して、幼児なりのやり方で注意し、**自主的な意思を形成**して介入するようになった。また、4歳児は、なぐさめのように**相手の心的状態や意図**に言及するようになった。また、複数の幼児同士で、役割分担をして、連携して介入するようになった。

C. 5歳児では、葛藤を解決に至らせることは少数であるが、介入児同士で葛藤の経緯について**情報収集や意見交換**をしたり、当事者に**丁寧な説得**をしたりしていた。介入児自身も葛藤状況を理解し、状況改善を図った。さらに、5歳児は介入によって**当事者の関係修復や遊びを継続させるための状況転換**を図るようになった。

**研究2：保育者の援助の変化が幼児の介入に及ぼす影響**

A'. 3歳児では、保育者は**積極的に当事者同士の仲介役**を担っていた。3歳児は、保育者の積極的な援助を足掛かりとして、介入を実行し、「介入」という型を定着させたのではないかと。

B'. 4歳児クラスでは、保育者は**積極的な援助は控え、見守る援助**をしていた。このような保育者の援助によって、4歳児は葛藤状況を自ら判断し、自分の意思を形成し表現して介入するようになったと示唆される。

C'. 5歳児クラスの保育者は、非当事者の幼児も含めて「話し合い」を**促す援助**を重視していた。このような援助が、5歳児の積極的で妥協しない介入に通じたと考えられる。

**研究3：ある幼児の3年間における社会的調整：「喧嘩するけど仲良し」の友達を中心に**

対象児チヅルは、入園当初は固定的な友達がおらず、園での身の置き所がなかった。チヅルは、園での身の置き所のなさを解消するために、自分と同じく特定の友達がいないユリとの「喧嘩するけど仲良し」関係を結んだ。チヅルは、ユリと「喧嘩するけど仲良し」関係を結ぶことで、自己調整が難しいユリと自分自身や他児との関係調整をする必要があり、対人葛藤場面における当事者及び非当事者としての調整能力を高めた。チヅルは、自らが置かれた特有の社会的環境を活かしながら、他児の対人葛藤への介入などの社会性を高めていった。

**課題**：本研究で明らかにした幼児の介入の発達が児童期におけるもめごとやいざこざへの対立へのより複雑で高度な仲介の発達にいかに通じるのかということについて検討を行いたい。